

「い落ち」表現を端緒とする言語学的諸問題

立 石 浩 一

Issues on a Japanese Linguistic Phenomenon Called *I-Ochi* (*i-Drop*).

TATEISHI Koichi

Abstract

A currently to-be-grammaticized phenomenon called *i-ochi* (*i-Drop*) in Japanese will be discussed. *I-Ochi* has been regarded as the dropping of the *i*-ending in Japanese adjectival conjugational patterns. However, this particular description of *i-ochi* is both morphosemantically and phonologically inadequate. *I-ochi* is only a token of the generally attested phenomenon called “Emphatic Moraic Obstruent”. Corresponding cases are observed in nouns, adjectival nouns (*keiyō-doshi*), mimetics (onomatopoeia) and verbal nouns (*suru-doshi*). In other words, it is only a case of suffixing a moraic consonant at the end of a word to show eventual evidentiality. For example, *kodomo* “child” derives a sentence *KodomoQ!* “How childish this person is!” (where *Q* is a moraic consonant). The so-called *i-ochi* in Japanese adjectives is another such case, deriving, for example, *AmaQ!* “How sweet it is!” from *amai* “sweet”. *I-ochi* has been so far called *i-ochi* (*i-Drop*) only because, only in the case of adjectives, the conjugational ending *-i* is dropped before the *-Q* suffix. The reason adjectives are special lies in the conjugational patterns of Japanese adjectives. In the past tense, Japanese adjectives take the form, for example, *amak-at-ta*, where the root ending *i* alternates with *k*. A similar pattern is also observed in Japanese verbal conjugation. The velar ending consonantal conjugational patterns (*ka/ga-gyō godan katsuyō*) regularly show alternation of /k,g/ and /i,j/ (e.g. *kaku* “write (present)”, *kaita* “wrote”). If we assume that the surface /i,j/ is underlyingly /k/ in the relevant cases, the apparent dropping of *-i* in adjectives can be accounted for. When *-Q* suffixes to, for example, *amai* (now underlyingly *amak*), the output will be *amak-Q*. The batting of consonants will result in deletion of one because Japanese is a typical short open syllable language. It is *k* that deletes, because *-Q*, which is semantically contentful, must be realized.

キーワード：文法化、言語学、形態素、音韻論、必異の原理

Key words: Grammaticization, linguistics, morphology, phonology, Obligatory Contour Principle

1 はじめに

近年、いわゆる「若者言葉」の一つとして、「い落ち」現象がクローズアップされることが多い。今野（2012）などによる言語学的視野からの分析も散見されるようになっている。

「い落ち」と一般的に言われているのは「旨っ。」「甘っ。」といった形容詞を使った、主に目前の出来事に対する臨場感の表現である。本論文では、「い落ち」の本義は「い」の脱落ではなく、「促音の付加」であることを指摘し、「い」が脱落するのはその帰結に過ぎないと結論づける。

これを示す過程の中で、そもそも「い落ち」は形容詞に縛られるという先入観が間違っていることを指摘し、これはより一般的な現象であり、なおかつアクセント付与とも深く関わることも指摘する。

また、この現象の派生形を検討することにより、音韻論というものには、近年最適性理論（Prince and Smolensky (2004) など）の流れとして確実に存在する、「抽象性の排除」の方向性を完全に達成出来る物ではなく、ある程度の抽象性を持った音素的標示（黒田（1967））が不可欠であることも示唆する。

2 「い落ち」とは

先ほども述べた通り、「い落ち」と言って一般的に人々が思い浮かべるのは、下記のような表現である。

- (1) 甘っ。
- (2) 旨っ。
- (3) おいしっ。
- (4) かわいっ。

この意味論・語用論的分析については、今野（2012）等が述べていることがほぼ正しい（今野（2012）は統語論的分析であるが）。普通の形容詞、例えば、

- (5) 美しい。

は、一時的状態と恒常的状态の解釈の間に曖昧性がある。

- (6) あなたは、美しい。

には、「あなたは美しい人である。」という恒常的状态の解釈も可能だが、一方で、「大丈夫、

緊張する必要も物怖じする必要は無いよ。あなたは、美しい。さあ、自信を持ってステージに上がりなさい。」といった場合に出てくる。「とりあえず」美しい読みも可能である¹⁾。

ところが、

(7) わー、幹恵、美しっ。

となると、全く状況は異なる。これは、「今日の前にある幹恵（の写真）」を目撃した上での即時的反応であって、普段の幹恵の美しさには言及していないのである。

今「言及していない」と述べたが、もっと正確に言うと、「前提としている」あるいは、「期待している」と言った方が良いと思われる用例もある。

(8) 旨っ。

この例は、元々ある食品が旨いと期待していたか、あるいは全くその正反対、味については期待していない時に使われる場合が多い。何らかの「旨さ」についての前提・予見は、「い落ち」には必要なようである²⁾。

もう一つ、「い落ち」に必要なのは広い意味での「目撃」である。(7)も(8)も、もっともよく使われるのは、たった今その姿・味を「経験している」時であって、昨日のことを思い出して、

(9) ひどっ。

と言っても、それは「今」ひどいと思っているのであって、あくまで文によって表現されている事象は「今」の事象なのである。

以上のような意味で、「い落ち」表現は、「事象の臨場性の体験の表現」(eventual evidentiality expression) であると考えるのが妥当なようである。

3 「い落ち」は「い落ち」なのか？

今野(2012)は、形容詞における「い落ち」のみを扱っている。「い落ち」という構文の呼称自体も、これが形容詞固有の表現であることを前提としているので致し方ないのかもしれない。

しかしながら、「事象の臨場性の体験の表現」は、別に形容詞だけに存在するわけではない。和語動詞を除くほぼすべての品詞にこの種の表現は存在する。

(10) わ、こいつ子供っ。(名詞)

(11) わ、タイガース必死っ。(副詞/形容動詞)

(12) もう、ほんと感動っ。(する動詞)

(13) もうあたまぐるぐるっ。(擬態語)

(14) ベルトゆるゆるっ。(名詞?)

これらもすべて「事象の臨場性の体験の表現」であることには疑問の余地が無いと思われる。形容詞ではないので当然これらの表現には落ちる「い」は存在しない。ここに、「い落ち」の正体は「い」の脱落ではなく促音の付加ではないかという疑問が生じるのである。

今野(2012)はこの種の表現は「い落ち」とは別の構文であると述べているが、すべて現在形であること、今体験しているものについての表現であることなどから、これらは等質の表現・構文であると筆者は判断する。例えば、「昨日の先生の酔っ払い方はもうべろべろ。」とは言いが、「昨日先生の酔っ払い方はもうべろべろっ。」とは普通言わないことから考えても、「語末の促音付加」に「臨場的体験」の意義があることは間違い無いものと思われる。

4 「い落ち」はなぜ「い落ち」と呼ばれるのか?

では、なぜこの構文を「い落ち」と呼ぶのはなぜか?確かに形容詞だけが特殊に見えるのである。「い」が落ちることもその一つなのだが、実はもう一つ形容詞が特殊である事実がこの構文については存在する。

名詞の該当表現を見てみたい。まず下記の同じような意味の名詞のアクセントを確認していただきたい。

(15) マニア

(16) オタク

「マニア」は第一音節にアクセントがある頭高型、「オタク」は無アクセント、すなわち平板型である³⁾。

「臨場性の促音」は平板型の表現にしか付加しないのである。

(17) *わあ、マニアっ。

(「*」は文法的不適格性を表す。)

(18) わあ、オタクっ。

(17) は、「わあ、おまえマニアだな。」という、この構文が意図している意味では使うことが出来ない。(「わあ、マニアがいっぱい!」という意味では使えるかもしれないが。)もちろん、強引に平板化して、

(19) ??わあ、マニアっ。(平板型)

(「?」は軽度の不適格さを表す)

とは言えないことは無いが、いかにも強引に作った感がある。つまり、「臨場性の促音」には、単に形容詞で「い」を落とすことだけではなく、アクセントの条件付けもあり、それ自体としてかなり自律的な形態素であると考えられるのである。

ここで、もう一つの「形容詞の特殊性」が発現する。形容詞にもアクセントがあるものと無いものがある。

(20) あかい (赤い：平板型)

(21) うまㄱい (旨い：中高型)

この「臨場性の体験を表現する促音」は、形容詞に関しては元々のアクセントの有無にお構いなしに付与するのである。

(22) 赤っ。

(23) 旨っ。

ただし、結果として生じる形式は「必ず平板型」なのである。

(24) うまっ

(25) *うㄱまっ、*うまㄱっ

発現の仕方こそ違えど、「平板性」が「臨場性の体験の促音」には必須条件なのである。

この事実は、抽象的分析ではあるが、この促音形態素が、それ自体アクセントを持っていると考えれば説明可能である。

日本語の一部接尾辞には、それに付加する語幹のアクセントを打ち消す力があるものがある (McCawley (1968))。

(26) ここㄱろ (心) + くㄱらい → こころぐㄱらい

(27) いㄱのち (命) + くㄱらい → いのちぐㄱらい

これは、「必異の原理」 (Obligatory Contour Principle (McCarthy (1986))) と呼ばれる汎言語的に観察される音韻的事実に基づく物と思われる。

(28) 必異の原理

同一の要素が一つの形式の中に複数並立してはいけない。

(28) に基づき、「アクセント」という要素の並立が嫌われ、語幹のアクセントは実現化されないものである。

この必異の原理であるが、並立という好まれな状態を解消するための処理方法は言語間、また同じ言語内でも現象によって異なっていることが知られている。例えば日本語内でも、別の助詞「まで」は、自分自身のアクセントを打ち消すことで、必異の原理に従う結果を導き出す。

(29) まゆふ（真冬：平板）＋まで→まゆふまで

(30) こころ＋まで→こころまで

(31) いのち＋まで→いのちまで

結果、「まで」のアクセントが表面に現れるのは、平板型、すなわちアクセントの無い語に付加した場合のみとなる。

さて、今回問題となる「臨場性の体験の促音」が仮にアクセントを持っているとすると、下記のような説明が可能となる。

(32) 「-っ」は、アクセントの並立を引き起こすような語幹には付加しない。

これもまた別の必異の原理に従うための解法を使うのである。

(33) オタク（平板）＋-っ→オタクっ

(34) マニア＋-っ→付与不可能

では、形容詞の場合はなぜアクセントのある形容詞にも「っ」は付加可能なのだろうか？実は、形容詞のアクセントは名詞などと異なり、特定の拍に固定されたものではない。例えば、

(35) あかい、あかかった（赤い、赤かった）

(36) うまい、うまかった（旨い、旨かった）

形容詞のアクセントは、語根のアクセント付与可能性、活用形などの諸条件に従って表面に規則的に生じる物であり、形容詞自体がアクセントを特定の拍に固定して持っているという性質の物ではない。

となると、「-っ」との共起可能性については、下記の説明が可能である。

(32') (改) 「-っ」は、特定の拍に結びついたアクセントと共起しない。

(つまり、「-っ」自体も特殊拍にアクセントを持っており、その並立を容認しない。)

結果的に、「あかつ。」「うまつ」が平板に聞こえるのは、アクセントは「-っ」にあるからである。形容詞語根がアクセントを持つ可能性はこの場合「-っ」によって打ち消されるのである。

「-っ」のアクセントは、下記のような例において発現する。従って、特殊拍である促音にアクセントがあると考えるのはさほど不自然なことではない。

(37) 太郎はそれを見て「大げさっ」と言った。

(38) (参考) 太郎をそれを見て大げさと言った。(「大げさと」は平板)

5 カ行とイ段

アクセントにおける「い落ち」の特殊性は、ある程度理由付けが出来たように思う。次に問題となるのは、何故形容詞だけ「い」を落とすのか、という点である。

これに関連して、日本語の舌背音 (dorsal sounds) の特殊性に言及する必要がある。まずは下記のカ行五段活用動詞の活用を見ていただきたい。対照するためサ行及びタ行の活用も並記する。

(39) 書く、書いた、書かない

(40) 嗅ぐ、嗅いだ、嗅がない

(41) 貸す、貸した、貸さない

(42) 勝つ、勝った、勝たない

サ行及びタ行の活用では、現在形・過去形・否定形のすべてで、その本来の活用形、つまりサ行とタ行の音、すなわち/s,t/は維持される⁴⁾。

しかしながら、カ行の過去形においてのみ、いわゆるイ音便、すなわち、/k,g/と/i/もしくは/j/との交替が起こる (Ito and Mester (1986))。

この交替現象は動詞だけではない。形容詞でも同様の交替がある。

(43) 赤い、赤かった

(44) 旨い、旨かった

これと名詞、形容動詞の活用を対照してみる⁵⁾。

(45) 犬だ、犬だった

(46) 静かだ、静かだった

すると、下記のような分析が可能になる。まずは名詞・形容動詞である。

(47) [inu-da + at]+ ta → inudat-ta

「だ」の a と語幹形成接尾辞 -at の a の衝突は、先ほどの必異の原理により、片方の a が削除さ

れることで解消されることになる。

これが正しいとすると、形容詞では下記のような分析が適当であろう。

(48) aka(k/i) + at + ta → akakat-ta

過去形に存在する k 音は形容詞に固有の活用形式である。従って、これは形容詞語根の一部として存在していると考えるのが適切であろう。

こう考えると、通常の終止形・連体形で i で終わっている物が、他の形式では -k で終わっていることになり、ここでも /k/ と /i/ という舌背音同志の交替が起こっていることになる。

とすると、「い」落ちの事実、下記の仮定をすることで説明が出来る。

(49) 形容詞の語彙部門における規定形式は /i/ ではなく /k/ で終わっている。

日本語には

(49) 赤 k。

(50) 赤 kつ。

という形式は存在しない。前者は、子音はいわゆる特殊拍以外は音節末には来ないということから、後者は、強引に仮名書きするなら「赤っつ」であろうが、これを文字で書くことは出来ても、それに相当する発音（おそらく [akakk] もしくは [akakʔ]⁶⁾）は日本語ではあり得ない。

(49) においては、従って k は拍として正しく実現化されるために、舌背性という特徴を維持しつつ日本語で拍として認可される音、/i/ へと表面では変化する。(50) においては、「っ」という意味を持つ形態素を削除するわけにはいかないの、語根末の k の方を言わない、という選択がなされるのである。

「い」落ちにおいては、落ちているのは「い」ではないのである。

6 形容詞における「落ち」の正体

最終的に、「い」落ちは、下記のような現象であるということになる。

(51) 必異の原理に基づく、基底子音の非具現化。

つまり、k と促音は共に子音なので、k が実現化されない、ということである。

促音自体の必異の原理に基づく共起制限も実は存在する。

(52) あっつ。、あっつ。、??あっつ (熱い)

(53) うっとおし。?うっとおし。 (うっとおしい)

(54) ぐるぐる、ぐっぐる、ぐるっぐる、*ぐっぐる

擬音語の方がデータははっきりしているが、促音が同じ語幹に二つ共起すること自体もあまり好まれない。「い」落ちにおいても、容認度はかなり上がるが、使用頻度は促音の共起の方が少ないように思われる。

これは、音韻論的には以下のことを示す。

(55) 促音は、「促音」として自立した一つの音素として振る舞える (→(52-54))。

(56) 一方で、促音は他の子音とで必異の原理の違反を引き起こす要素になり得る
(→「い」落ち)。

黒田 (1967) は、日本語の促音を子音性だけを持つ一種の原音素 (archiphoneme) としてとらえることで、日本語五段活用動詞活用などの分析を試みた⁷⁾。上記事実は、これに近い分析が未だに必要であることを示しているように思える。

これは、現在の音韻論における抽象性の排除の原則からはやや乖離しているように思えるが、そもそも他の物では無い「っ」という形態素が存在し得ることが、この抽象性に対する議論となるのではないだろうか？形態論と音韻論（そして音声学）との関係において、いわゆる「い」落ちは、大変興味深い現象なのである。

7 終わりに

「い」落ちは実は「い」の削除ではなく、「必異の原理」というかなり広範囲の現象の説明に使われる原理の、「子音の」並立に対する処理の一手法であること、また、「っ」は単に強調のためについているのではなく、それ自体意味を持った形態素であることをこの論文では論じた。

最後に、必異の原理に関する興味深い事実を一つ提供して、この論文を終わりとしたい。

(57) 綺麗っ (「きれっ」) / 綺麗 (きれい) / *きれいつ

「綺麗」の「い」は、形容詞語幹では無く、漢語音読みの語根の末尾にある。これで、「臨場性の体験」を表現しようとする、「い」落ちが必ず起こるのである⁸⁾。

これが意味することは、「い」は常に「舌背子音」として分析する余地がある、ということであり、これ自体非常に興味深い。

一方で、

(58) 華麗っ。

は、普通に使える表現なのであり、語彙毎の「い」の扱いに関する許容範囲はどうなのかは、

今後の研究の課題となろう。

それと関わり、下記の表現は大変興味深い。

(59) 可愛っ。(「かわいっ」)

もしこれが、先の分析に従い、

(60) kawakk + っ

であるとするなら、ここでは「っ」と隣接する k は具現化させず、語根の中側の k は拍として実現化しているとするなら、それ自体が必異の原理に従うための音韻操作として興味深いものであるのは言うまでもなく、そもそも (60) のような語彙構造が可能なのかどうかについても検討を要するものである。「舌背性」をどこで具現化しどこで具現化しないのかについては、まだまだ研究の余地があるものと思われる。

注

- 1) 例えば、「ほら見て、あの夕日、とっても美しい。」となると、一時的状態の解釈が強くなる。
- 2) 回廊を抜けて大きな広間にいきなり出た時に「広っ。」となるのも同じようなことである。「広さ」が全く予期されていないわけである。
- 3) 日本語のアクセントはアクセントを持つ音節が高音調、それ以下が低音調になることで表現される。平板型は第一拍が低、それ以下が高で持続される。「ㇿ」の直前の音節・拍がアクセントを持つと解釈されたい。
- 4) ワ行、ラ行などについては、この議論と関連性の無い別の説明が必要になるのでここでは省略する。
- 5) ここではこれらの形式が歴史的にどのように形成されてきたかは問題ではないので、共時的にどうであるかだけを検討する。
- 6) [ʔ] は声門閉鎖音である。
- 7) 黒田 (1967) においては、撥音は鼻音性を持つ同じく原音素としていた。
- 8) それと同時にアクセントの平板化も起こるので、これが特殊な派生であることは間違いが無い。

参考文献

- Ito, Junko and Ralf-Armin Mester (1986) "The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for Morphological Accessibility." *Linguistic Inquiry* 17.1, pp. 49-73.
- McCarthy, John (1986) "OCP Effects: Gemination and Antigemination." *Linguistic Inquiry* 17.2, pp. 207-263.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, Mouton, The Hague.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Wiley-Blackwell, Malden, MA.
- 黒田成幸 「促音と撥音について」『言語研究』50, pp. 85-99.
- 今野弘幸 「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141, pp. 5-32.

(原稿受理日 2012年 9月18日)